

昭和49年度秋冬作野菜・花き関係 除草剤, 生育調節剤試験成績概要

農林省野菜試験場育種部長 西 貞夫

標記の試験成績検討会は、去る昭和50年7月3、4日の両日、北海道札幌市の北海道庁共済会館において開催された。(財)日本植物調節剤研究協会(以下植調協会と略す)の野菜・花き関係成績検討会は、原則として秋冬作のそれを東京(周辺)、春夏作のそれは除草剤試験に実績のある地方で、おのおの開催することとして運営されてきた。今回は秋冬作関係の検討会であるが、前回の検討会が植調協会研究所の開所式とかち合い、東京で持たれたことから、今回は梅雨のない北海道でということになった。あいにく、検討会当日から曇天となり、‘さわやかな北海道’からは、ほど遠い天候であったが、北農試、道中央農試、同道南農試のご援助を得て、能率的かつ内容の濃い検討会をもつことができた。また植調協会の北海道支部の職員各位には、少人数でありながら、きわめて周到な準備と、会の進行についてのご配慮を頂いた。検討会は植調協会のもの、といえは当然ということにもなるが、その範囲を越えた努力を頂いたことについて、参加者を代表して謝意を述べたい。

成績検討の結果は、別表に集約したとおりであるが、今回は第3日(5日)に北海道農試ほかの見学を実施した関係から、2日間で判定会議も完了するという忙しい(?)日程であった。参集した人員は、試験場側が、地元北海道から

長崎総農試に及ぶ34場所52名、メーカー側は29社、40名に達した。

今回検討された薬剤は、除草剤が18、生育調節剤8であり、これと作物とが組み合わされて、全体として除草剤で46、生育調節剤で、18の成績が討議された。その結果、除草剤で20、生育調節剤で9の実用化(実・継も含む)判定があった。したがって歩止りで見ると、前者が43.5%、後者が50%という高率になる。今回の検討会で目立ったことが二つある。一つは新規薬剤が汎用性を目標として複数の作目について試験されていることであるが、他の一つは試験箇所数の問題である。筆者はかねがね野菜の場合の試験箇所数の少ないことに、少なからぬ不満を持ってきたが、実用化となった場合の使用量などを考えて、メーカー側の投資(?)の少ないのは止むを得ないものありと、妥協的な態度をとってきた。しかし試験担当者の間から、唯でも変異の多い畑作条件下の試験が3箇所や5箇所、多くても7箇所という様なことで、責任の持てる判定を下せるのかという批判を、かけながらではあるが、受けていることは承知していた。また用途拡大の試験として取り扱う場合の態度が、例えばナス科での登録(あるいは実用化可との判定)を、安易にウリ科やアブラナ科などにまで及ぼしすぎると、‘カナエ’の軽重を問われていたことも承知していた。筆

者の本意は、しかし、安直な登録や実用化にあるのではなく、その様にして試験のやりやすい条件をつくり、試験例のつみ重ねを多くするという願ひにあった。このことは各作目ごとの試験費についてもあらわれているといつてよく、筆者はメーカー側の負担をなるべく、リーズナブルなものとし、同時に試験担当者側の労を軽減するべく、試験の内容・調査方法の合理化に多大の努力を重ねてきたつもりである。しかし現実に試験を委託し、それを受けるのは、メーカー各位と植調の間の問題であるので、意見は述べてはきたが、個所数の多少も考慮して結果を判断するという様なことは（なされたことは）、従来はなかったといつてよい、しかし3～5個所程度の試験数の場合は、一つ一つの試験結果が占めるウェイトが、30～20%という大きなものになるので、否定的な結果の場合など、その影響は相当に大きなものとならざるを得ないということは、常々発言してきたし、その様な結果の責任(?)は申請者の側にあるということも述べてきたつもりである。

今回の検討会において、その様な例が具体的にあった。試験継続で、その面での判定可能な薬剤が、試験例数不足という担当者の判定で、相当の成績を収めながら、継続とされている。

その薬剤の従来の成績からすると、実・継程度の判定も期待されるような結果であったが、‘この程度の試験例でよろしいのか’という担当者の声で、判定を得ることができなかったのである。筆者としては、上に述べたような経過から、責の一端を負うことにやぶさかでないが、反面自分と同様の判断を参集者の多くが持っておられたことを知って、安心したことでもあった。これは植調の試験システムそのものに関係することなので、軽卒な論議は避けねばならないが、今後の判定に試験例数への考慮が大きくなることは、避けられないことであろう。

なお、今回の検討会の冒頭に当って、植調協会の吉沢常務からあいさつがあったが、その中で同氏は、昭和49年度の畑作除草剤使用面積（大部分が野菜）が163万haに達することを紹介するとともに、今後の除草剤開発の目標として、① 作物・土壌残留の少ないもの、② 茎葉処理剤の開発、③ エチレン添加などの様な除草剤使用量節減方法の開発などをあげられた。また畑作用除草剤については、特に残留を軽減し、また草種の変遷に及ぼす影響を重視する意味から、同一薬剤による‘反復処理’という方法をやめて、なるべく異種薬剤による‘体系処理’に進むことを考慮されたいとの希望を述べられた。

昭和49年度秋冬作野菜花き関係除草剤・生育調節剤一覧ならびに判定表

Ⅰ. 除 草 剤

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 〔商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由および 内 容
1.野菜一般 〔直はん〕 〔移植〕	(1)SL-67	水和	〔未公開〕 40%	新規	石原産業	野菜試盛岡支場(直はん)、 同久留米支場 (移植)	継	試験年次不足

作物名 〔作型 栽培法〕	薬剤名 〔種類名 商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由および 内容
2. キャベツ 〔夏まき露 地移植〕	(1)ANK -553 (トルイ ジン系)	乳	N-(1-エチルプロ ピル)-3,4-ジメ チル-2,6-ジニ ロアニリン 30%	継 続	ANK研究会 〔日本農薬 クミアイ 化学工業 日本サイア ナミッド〕	東京農試, 神 奈川園試 三 浦分場, 岐阜 農試, 広島農 試, 熊本農試 園芸支場	実	〔夏まき露地移 植〕 ・定植前20~ 40ml全面土 壌処理
〔夏まき露 地移植〕	(2)S-28 〔(有機リ ン系) クレマート〕	乳	O-エチル-O-(3- メチル-6-ニ ロフェニル)-N- セカンダリーブチル ホスホロチオアミ ン 50%	新 規	住友化学工業	東京農試, 岐 阜農試, 兵庫 農試, 広島農 試, 熊本農試 園芸支場	実	〔夏まき露地移 植〕 ・定植前20~ 40ml全面土 壌処理
〔夏まき露 地移植〕	(3) SL-55	乳	〔未公開〕 25%	新 規	石原産業	群馬園試, 兵 庫農試	継	試験年次不足
〔夏まき露 地移植〕	(4) SL-55	水和	〔未公開〕 40%	新 規	石原産業	群馬園試, 東 京農試, 岐阜 農試, 兵庫農 試, 熊本農試 園芸支場	継	試験年次不足
〔夏まき露 地移植〕	(5) SL-67	水和	〔未公開〕 40%	新 規	石原産業	群馬園試, 兵 庫農試	継	試験年次不足
3. ハクサイ 〔秋まき 露地〕	(1)ANK -553 (トルイ ジン系)	乳	N-(1-エチルプロ ピル)-3,4-ジメ チル-2,6-ジニ ロアニリン 30%	継 続	ANK研究会 〔日本農薬 クミアイ 化学工業 日本サイア ナミッド〕	野菜試盛岡支 場, 茨城園試, 富山農試礪波 園芸分場, 岐 阜高冷地農試	継	薬量を下げて再 検討
〔秋まき 露地〕	(2)S-57 〔酸アミド系〕	乳	エチルN- α -クロロ アセチル-N-2,6- ジエチルフェニル グリシネート 25%	新 規	住友化学工業	野菜試盛岡支 場, 茨城園試, 富山農試礪波 園芸分場, 岐 阜高冷地農試	継	試験年次不足

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名・ 商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
〔秋まき 露地〕	(3)S-97 (酸アミド系)	乳	〔未公開〕 25%	新規	住友化学工業	野菜試験岡岡支 場、茨城園試、 富山農試破波 園芸分場、岐 阜高冷地農試	継	試験年次不足
4. ハウレンソウ 〔秋まき 露地〕	(1)S-57 (酸アミド系)	乳	エチルN- α -クロロ アセチル-N-2,6 -ジエチルフェニル グリシネート 25%	新規	住友化学工業	埼玉園試入間 川支場、石川 農試、愛知農 総試園研、広 島農試、徳島 農試	継	試験年次不足
〔秋まき 露地〕	(2)S-97 (酸アミド系)	乳	〔未公開〕 25%	新規	住友化学工業	埼玉園試入間 川支場、石川 農試、愛知農 総試園研、広 島農試、徳島 農試	継	試験年次不足
5.レタス 〔トンネル・ マルチ移植〕	(1)ANK -553 (トルイジ ン系)	乳	N-(1-エチルプロ ピル)-3,4-ジメ チル-2,6-ジニト ロアニリン 30%	新規	ANK研究会 〔日本農薬 タミアイ 化学工業 日本サイア ナミッド〕	千葉農試南総 園研、千葉暖 地園試、静岡 農試遠州園芸 分場、香川農 試、熊本農試 園芸支場	実	〔トンネルマル チ移植〕 ・定植前マルチ 前20~40m ² 全面土壌処理
〔露地移植 ・定植前〕	(2) NK-049 〔メトキシフ エノン〕	水和	3,3-ジメチル-4- メトキシベンゾフ エノン 50%	新規	日本化薬	千葉農試南総 園研、静岡農 試遠州園芸分 場、熊本農試 園芸支場	継	試験年次不足
〔露地移植 ・定植後〕	(3) NK-049 〔メトキシフ エノン〕	水和	3,3-ジメチル-4- メトキシベンゾフ エノン 50%	新規	日本化薬	千葉農試南総 園研、静岡農 試遠州園芸分 場、熊本農試 園芸支場	継	試験年次不足
〔露地移植〕	(4) NTN-80	水和	0-メチル-0-(2 -ニトロ-P-トリ 新 規	新規	日本特殊 農薬製造	千葉農試南総 園研、静岡農	実	〔露地移植〕 ・定植前

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名・商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき) 〔露地移植〕	(有機リン系) トクノールM		ル)N-イソプロピ ルホスホロアミドチ オネート 60%			試遠州園芸分 場, 香川農試		25~50g 全面土壌処理
〔露地移植〕	(5)S-28 (有機リン系) クレマート	乳	0-エチル-0-(3- メチル-6-ニト ロフェニル)-N- セカンダリーブチ ルホスホロチオアミデ ート 50%	継 続	住友化学工業	千葉農試南総 園研, 静岡農 試遠州園芸分 場, 香川農試, 福岡園試, 大 分農技センタ ー	実	〔露地移植〕 ・定植前20~ 40ml 全面土 壌処理
〔トンネル・ マルチ移植〕	(6)S-28 (有機リン系) クレマート	乳	0-エチル-0-(3- メチル-6-ニト ロフェニル)-N- セカンダリーブチ ルホスホロチオアミデ ート 50%	継 続	住友化学工業	千葉農試南総 園研, 静岡農 試遠州園芸分 場, 香川農試, 福岡園試, 大 分農技センタ ー	実	〔トンネルマル チ移植〕 ・定植前マルチ 前20~50ml 全面土壌処理
6.タマネギ (苗床) 〔苗床・ 露地〕	(1)DAC -893 〔TCTP〕 ダクタール	水和	ジメチルテトラクロ ルテレフタート 75%	継 続	昭和ダイアモ ンド化学	岐阜農試, 和 歌山農試, 兵 庫農試, 香川 農試, 佐賀農 試	実・ 継	実:〔苗床〕は 種後80~130 g 全面土壌処 理 継:土性・薬量 と薬害の関係 について
7.タマネギ (本畑) 〔本畑:秋 まき移植〕	(1) A-820 (トリイジ ン系)	乳	N-セカンダリーブチ ル-4-ターシャリ -ブチル-2,6-ジ ニトロアニリン 43%	継 続	2,4-D 協議会 〔石原産業〕 日産化 学工業	長野園試, 和 歌山農試, 佐 賀農試	実・ 継	実:〔秋まき移 植〕 定植後および 春季雑草発生 前20~40 ml 反復全面 土壌処理 継:地域性(場 所致増)およ び体系処理に ついて
〔本畑:秋 まき移植〕	(2)ANK -553	乳	N-(1-エチルプロ ピル)-3,4-ジメ	継 続	ANK研究会 日本農薬	長野園試, 愛 知農総試園研,	実・	実:〔秋まき移 植〕

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	新・継 の別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき) 〔本畑：秋 まき移植〕	(トルイジ ン系)		チル-2,6-ジニト ロアニリン 30%		〔クミアイ〕 化学工業 日本サイア 〔ナミッド〕	岐阜農試, 兵 庫農試, 淡路 分場, 福岡園試	継	定植後40~ 50ml全面 土壌処理 継：薬量と体系 処理について
〔本畑：秋 まき移植, (水田裏作)〕	(3) NK-049 〔メトキシフ ェノン〕	水和	3,3-ジメチル-4- メトキシベンゾフェ ノン 50%	継 続	日 本 化 薬	愛知農総試園 研, 岐阜農試, 和歌山農試, 香川農試, 福 岡園試, 佐賀 農試	実・ 継	実：〔秋まき移 植(水田裏作)〕 活着後80g および春季雑 草発生前80 ~100g反 復全面土壌処 理 継：雑草々種に ついて
〔本畑：秋 まき移植, (水田裏作)〕	(4) NP-24 (ピラン系)	水和	3-[1-(エトキシ アミノ)プロピリデ ン]-6-エチル- 3,4-ジハイドロ- 2H-ピラン-2,4- ジオン 40%	新 規	日 本 曹 達	岐阜農試, 和 歌山農試, 香 川農試, 福岡 園試, 佐賀農 試	継	試験年次不足
〔本畑：秋 まき移植〕	(5) NTN-80 〔(有機リ ン系) トクノールM〕		0-メチル-0-(2- ニトロ-P-トリ ル)N-イソプロピ ルホスホロアミドチ オネード 60%	継 続	日本特殊 農業製造	岐阜農試, 香 川農試, 佐賀 農試	実	(昨年通り) 〔秋まき移植〕 ・定植後30~ 50gおよび春 季雑草発生前 40g反復全面 土壌処理
〔本畑：秋 まき移植〕	(6) PL 〔レナシル ・PAC レナバップ〕	水和	レナシル：3-シクロ ヘキシル-5,6-エト リメチレンウラシル 40% PAC：1-フェニル -4-アミノ-5- クロルピダジン 30%	新 規	丸和バイオケ ミカル 北興化学工業	和歌山農試, 兵庫農試淡路 分場, 佐賀農 試	継	試験年次不足

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
〔本畑：秋 まき移植、 露地〕	(7) S-28 〔(有機リ ン系) クレマート〕	乳	0-エチル-0-(3- メチル-6-ニト ロフェニル)-N- セカンダリーブチル ホスホロチオアミデ ート 50%	継 続	住友化学工業	長野園試、岐 阜農試、 兵庫農試淡路 分場、香川農 試、佐賀農試	実	〔秋まき移植〕 ・定植後および 春季雑草発生 前20~40 m ² 反復全面 土壌処理
〔本畑：秋 まき移植、 (水田裏作)〕	(8) SKH-01 〔シアナジン グラメッ クス〕	水和	2-(4-クロロ-6- エチルアミノ-N- トリアジン-2- イルアミノ)-2- メチルプロピオニ トリル 50%	継 続	シエル化学 石原産業	岐阜農試、和 歌山農試、兵 庫農試淡路分 場、香川農試、 佐賀農試	実・ 継	〔秋まき移植〕 実：10~15 g 活着後全面 土壌処理 継：薬量および 体系処理につ いて
〔本畑：秋 まき移植、 (水田裏作)〕	(9) SL-38	乳	2-エトキシ-2,3- ジハイドロ-3,3- ジメチル-5-ベン ゾフラニルメタン- サルホネート 20%	新 規	石原産業	兵庫農試、福 岡園試	継	試験年次不足
〔本畑：秋 まき移植、 (水田裏作)〕	(10) SL-55	乳	〔未公開〕 25%	新 規	石原産業	兵庫農試	継	試験年次不足
〔本畑：秋 まき移植、 (水田裏作)〕	(11) SL-55	水和	〔未公開〕 40%	新 規	石原産業	静岡農試、愛 知農試試園研、 兵庫農試、福 岡園試	継	試験年次不足
8.イ チゴ 〔露地 マルチ〕	(1)ANK -553 (トルイジ ン系)	乳	N-(1-エチルプロ ピル)-3,4-ジメ チル-2,6-ジニト ロアニリン 30%	新 規	ANK研究会 〔日本農業 クミアイ 化学工業 日本サイア ナミッド〕	神奈川県試、 兵庫農試、福 岡園試	継	試験例数不足 (薬量について 再検討)
	(2)ANK	乳	N-(1-エチルプロ	新 規	ANK研究会	栃木農試、東	継	試験例数不足

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名・商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき) 〔ハウスまたはトンネルマルチ〕	— 5 5 3 (トルイジン系)		ビル) — 3, 4 — ジメ チル — 2, 6 — ジエチ ロアニリン 30%		〔日本農薬 クミアイ 化学工業 日本サイア ナミッド〕	京農試, 神奈 川園試		(薬量について 再検討)
〔露地 マルチ〕	(3) B—3015 〔ベンチオ カーブ サターン 乳 剤〕	乳	S—(4—クロルベン ジル) N,N—ジエチ ルカーバメート 50%	新 規	クミアイ 化学工業	愛知農総試園 研, 岐阜農試, 兵庫農試, 長 崎総農試, 佐 賀農試	継	試験結果不一致 (薬量・薬害に ついて再検討)
〔トンネル マルチ〕	(4) B—3015 〔ベンチオ カーブ サターン〕	乳	S—(4—クロルベン ジル) N,N—ジエチ ルカーバメート 50%	新 規	クミアイ 化学工業	愛知農総試園 研, 岐阜農試, 兵庫農試, 佐 賀農試, 長崎 総農試	継	試験結果不一致 (薬量・薬害に ついて再検討)
〔露地 マルチ〕	(5) B— 3015・P 〔ベンチオカ ーブ・プロ メトリン サターン パーロー〕	乳	ベンチオカーブ: S— (4—クロルベンジ ル) N,N—ジエチル カーバメート 50% プロメトリン: 2—メ チルチオ—4, 6—ビ ス—イソプロピルア ミノ—s—トリアジ ン 5%	新 規	クミアイ 化学工業	愛知農総試園 研, 岐阜農試, 兵庫農試, 佐 賀農試, 長崎 総農試	継	試験年次不足 (薬量・薬害に ついて再検討)
〔トンネル マルチ〕	(6) B— 3015・P 〔ベンチオカ ーブ・プロ メトリン サターン パーロー〕	乳	ベンチオカーブ: S— (4—クロルベンジ ル) N,N—ジエチル カーバメート 50% プロメトリン: 2—メ チルチオ—4, 6—ビ ス—イソプロピルア ミノ—s—トリアジ ン 5%	新 規	クミアイ 化学工業	愛知農総試園 研, 岐阜農試, 兵庫農試, 佐 賀農試, 長崎 総農試	継	試験年次不足 (薬量・薬害に ついて再検討)

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名 商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内 容
〔ハウスまたはトンネル マルチ〕	(7)NTN — 80 〔(有機リ ン系) トクノールM〕	水和	0-メチル-0-(2- ニトロ-P-トリ ル)N-イソプロピ ルホスホロアミドチ オネート 60%	継 続	日本特殊 農薬製造	栃木農試, 埼玉 園試, 佐賀 農試	実	〔ハウスまたは トンネル, マ ルチ〕 ・定植後30~ 50gおよび マルチ前40 g 反復株間土 壌処理
〔トンネル マルチ(促 成)〕	(8)S-28 〔(有機リ ン系) クレマート〕	乳	0-エチル-0-(3- メチル-6-ニト ロフェニル)-N- セカンダリーブチル ホスホロチオアミデ ート 50%	継 続	住友化学工業	野菜試, 久留 米支場, 栃木 農試, 神奈川 園試, 福岡園 試, 大分農技 センター	実	〔トンネルマル チ(促成)〕 ・定植後および マルチ前20 ~40ml 反 復全面土壌処 理
〔ハウスマ ルチ〕	(9)S-28 〔(有機リ ン系) クレマート〕	乳	0-エチル-0-(3- メチル-6-ニト ロフェニル)-N- セカンダリーブチル ホスホロチオアミデ ート 50%	継 続	住友化学工業	千葉吸地園試, 栃木農試, 神 奈川園試, 福 岡園試, 大分 農技センター	実・ 継	実:〔ハウスマ ルチ〕 定植後および マルチ前20 ~40ml 反 復全面土壌処 理 継:品種, 処理 時期と薬害に ついて
〔ハウスマ ルチ〕	(10) SL-38	乳	2-エトキシ-2,3- ジハイドロ-3,3- ジメチル-5-ベン ゾフラニルメタン- サルホネート 20%	新 規	石原産業	福島園試いわ き支場, 福岡 園試	継	試験年次不足
〔ハウスマ ルチ〕	(11) SL-55	乳	〔未公開〕 25%	新 規	石原産業	埼玉園試	継	試験年次不足

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
〔ハウスまたはトンネル マルチ〕	(12) SL-55	水和	〔未公開〕 40%	新規	石原産業	福島園試いわ き支場, 奈良 農試, 福岡園 試	継	試験年次不足
〔露地 マルチ〕	(13) U-67 (酸アミド系)	水和	3,4,5-トリブロム- N,N,α-トリメチル ピラゾール-1-ア セトアミド 75%	新規	日本アップジ ョン	野菜試, 久留 米支場, 静岡 農試, 奈良農 試	実	〔露地マルチ〕 ・定植後および マルチ前(各) 30~40g 反復全面土壌 処理
〔露地 マルチ〕	(14) U-67 (酸アミド系)	粒	3,4,5-トリブロム- N,N,α-トリメチル ピラゾール-1-ア セトアミド 85%	新規	日本アップジ ョン	野菜試久留米 支場, 静岡農 試, 奈良農試	実	〔露地マルチ〕 ・定植後および マルチ前(各) 300~400g 反復全面土壌 処理
〔露地〕	(15) CI- IPC-CP -50144 〔IPC・ア ラクロール〕	乳	CI IPC: イソプロ ピル-N-(3-ク ロロフェニル)カー バメート 21.5% CP-50144: 2 -クロロ-2',6'-ジ エチル-N(メトキ シメチル)アセトア ニリド 21.5%	継続	日産化学工業 日本モンサント	北海道中央農 試原々種農場, 同道南農試	保留	試験完了をまっ て判定
9. ニンジン 〔冬まきト ンネルマル チ〕	(1) S-28 〔(有機リ ン系) クレマート〕	乳	0-エチル-0-(3 -メチル-6-ニト ロフェニル)-N- セカンダリーブチル ホスホロチオアミデ ート 50%	継続	住友化学工業	野菜試久留米 支場, 埼玉園 試入間川支場, 東京農試, 香 川農試, 長崎 総農試	実・ 継	実: 〔冬まきト ンネルマルチ〕 は種前マルチ 前20~40 ml 全面土壌 処理 継: 温度と薬害 について
〔トンネル・ 表面〕	(2) trif- luralin	乳	α,α,α-トリフルオ ル-2,6-ジニトロ -N,N-ジプロピ	新規	武田薬品工業	埼玉園試入間 川支場, 千葉 農試,	実	〔冬まきトンネ ル・表面処理〕 ・は種後20~

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき) 〔トンネル ・表面〕	トリフル ラリン トレファ ノサイド		ルバラートルイジン 44.5%			愛知農総試園 研, 徳島農試		40m ² 全面 土壌処理
〔トンネル ・混和〕	(3)trif- luralin 〔トリフル ラリン トレファ ノサイド〕	乳	α, α, α -トリフルオ ル-2,6-ジニトロ -N,N-ジプロピ ルバラートルイジン 44.5%	新 規	武田薬品工業	埼玉園試入間 川支場, 千葉 農試, 愛知農 総試園研, 徳 島農試	実 ・ 継	〔冬まきトンネ ル・混和処理〕 実: は種前15 ~35m ² 全 面土壌混和処 理 継: 土性と効果 について

Ⅱ. 前回未検討除草剤

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	実 施 年 度	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
1. ネ ギ 〔春まき 苗床〕	(1)DAC -893 〔TCTP〕 ダクタール	水和	ジメチルテトラクロロ テレフタート 75%	S49 春夏作 (新規 適用拡 大)	昭和ダイヤモンド	静岡農試 福島園試, いわき支場, 茨城園試, 埼玉園試, 三重農技セ ンターは提 出済	実 ・ 継	実: は種後11 0~150g 全面土壌処理 継: トンネル育 苗について再 検討
〔本畑: 秋 まき移植〕	(2)U-67 (酸アミド系)	粒	3,4,5-トリブロム- N,N, α -トリメ チルピラゾール-1 -アセトアミド 75%	S49 春夏作 (新規 適用拡 大)	日本アップシ ョン	静岡農試, 福 岡園試 茨城園試, 埼玉園試, 三重農技セ ンターは提 出済	継	試験結果不一致
2. ニンジン 〔春~初 夏まき〕	(1) A-820 (トルイ ジン系)	乳	N-セカンダリーブチ ル-4-ターシャリ -ブチル-2,6-ジ ニトロアニリン 48%	S49 春夏作 (継続)	2,4-D 協議会 〔石原産業〕 〔日産化学〕	徳島農試 埼玉園試入 間川支場, 香川農試, 大分農技セ ンターは提 出済	実	・は種後30~ 40m ² 全面 土壌処理

Ⅱ. 生育調節剤

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	新・継 の別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
1. タマネギ 〔苗床：秋 まき移植〕	ヒドロキシ イソキサゾ ール 〔発根、生 育促進剤〕 タチガレン	粉	3-ヒドロキシ-5- メチルイソキサゾ- ール 4%	新規	三 共	愛知農総試園 研、兵庫農試 淡路分場、佐 賀農試	継	試験例数不足
2. キュウリ 〔ハウス〕	AHC-50 〔土壌保水剤〕 ハイドロジ エル50G	粒	ポリエチレンオキサ イド 50%	新規	日本カーリット 長瀬産業	埼玉園試、栃 木農試	継	試験年次不足
3. メロン 〔ガラス室〕	AHC-50 〔土壌保水剤〕 ハイドロジ エル50G	粒	ポリエチレンオキサ イド 50%	新規	日本カーリット 長瀬産業	静岡農試遠州 園芸分場	継	試験年次不足
4. 露地 メロン 〔トンネル ・ハウス〕	ジベレリン 〔GA〕 〔GA+NA A+4-CP A〕 〔着果促進剤〕	顆粒 錠	ジベレリンA ₃ 3.1% 他NAA, 4-CPA ジベレリンA ₃ 2.78% 他NAA, 4-CPA	新規 (適用 拡大)	日本ジベレリ ン研究会 (事務局： 協和醸酵) 三 共	(プリンス) 茨城園試 長野園試 (キンショウ) 長崎総農試 (コサックまた はエリザベス) 山梨農試	保留	試験完了を待っ て判定
5. イチゴ 〔ハウス 促成〕	ジベレリン 〔GA〕 〔休眠打破剤〕	顆粒 錠	ジベレリンA ₃ 3.1% ジベレリンA ₃ 2.78%	新規 (適用 拡大)	日本ジベレリ ン研究会 (事務局・ 協和醸酵)	(宝交早生) 静岡農試 奈良農試 佐賀農試 (ダナー) 茨城園試 群馬園試 埼玉園試	実	〔宝交早生、ダ ナー：電照(加 温)を含む促成 栽培：休眠突入 抑制〕 ・休眠突入期と 7~10日後の 2回、10ppm 液5ml/株、 新葉を中心に散 布
6. 草花一般	(1)AHC -50	粒	ポリエチレン オキサ イド 50%	継 続	日本カーリット 長瀬産業	千葉農試、東 京農試	保留	試験完了を待っ て判定

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名〕 商品名	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき) カルセオ ラリア シネラリア 〔はち植 (プラスチック)〕	〔土壌保水剤〕 ハイドロジ エル50G							
キク カーネ ーション	(2) TGH-1 〔発根促進 剤IBA〕	粉	インドール酪酸 0.5%	新規	武田薬品工業	神奈川園試相 模原分場, 愛 知農総試園研, 兵庫農試	実	〔キク, カーネ ーション, さし 芽床〕 ・さし穂切口粉 衣処理
7.花木一般 (基礎試験)	TGH-2 〔発根促進 剤IBA〕	粉	インドール酪酸 1%	新規	武田薬品工業	福島園試いわ き支場, 神奈 川園試相模原 分場, 三重農 技センター, 兵庫農試	実・ 継	実:〔サザンカ, ツバキ, サツ キ, クルメツ ツジ, アジサ イ, ヒラドツ ツジ, マサキ〕 継:ドウダンツ ツジ, カイズ カイブキ等他 の花木につい て
8. チューリップ	(1)EL -531 〔わい化剤〕 エーレスト (旧アンシ ミドール)	液	α -シクロプロピル α -(P-メトキシ フェニル)-5-ビ リミジンメタノール 0.025%	新規	武田薬品工業	埼玉園試, 鳥 取農試西伯分 場	実・ 継	実:1~2ml (成分量0.2 5~0.5mg) /5号はち, 草丈け3~5 cm時, 土壌 かん注処理 継:品種とブラ インド発生に ついて
〔促成〕	(2)IBA 〔切花品質 向上, 開 花促進剤〕	液	インドール酪酸 0.4%	継続	塩野薬製薬	埼玉園試, 鳥 取農試西伯分 場, 福岡園試	実	〔促成栽培〕 ・定植後100 ~200ppm 液株当り1ml

作物名 〔作型・栽培法〕	薬剤名 〔種類名・商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき) 〔促成〕	オキシベ ロン							葉間滴下処理
9. ユリ	EL- 531 〔わい化剤〕 エーレスト (旧アンジ ミドール)	液	α -シクロプロピル- α -(P-メトキシ フェニル)-5-ビ リミジンメタノール 0.025%	継 続	武田薬品工業	野菜試久留米 支場、福岡園 試	実 ・ 継	実: 1~2 ml (成分量 0.2 5~0.5 mg) / 5号はち、 草たけ 5 cm 内外の時、土 壌かん注処理 継: 〔テッポウ ユリ〕処理時 期、処理回数 ・濃度につい て
10. シクラメン	ベンジルア ミノプリン 〔(BA) 〔開花促進剤〕〕	水 溶 液	6-ベンジルアミノ プリン 5%	新 規	興 人	埼玉園試、神 奈川園試、愛 知農総試園研	継	試験年次不足
11. キタ	EL- 531 〔わい化剤〕 エーレスト (旧アンジ ミドール)	液	α -シクロプロピル- α -(P-メトキシ フェニル)-5-ビ リミジンメタノール 0.025%	継 続	武田薬品工業	愛知農総試園 研	実	〔大輪作り〕 ・1 ml (成分 量 0.25 mg) / 5号はち、 はち上げ後 2 週間、茎葉処 理または土壌 かん注処理
12. ポインセチア	ベンジルア ミノプリン (BA) (わき芽生 育促進剤)	ペ ー ス ト	6-ベンジルアミノ プリン 0.25% 0.5%	継 続	興 人	神奈川園試、 愛知農総試園 研、高知大学	継	・処理時期・処 理方法につい て再検討
13. 洋ラン (デンドロ ビウム)	(1)EL- 531	液	α -シクロプロピル- α -(P-メトキシ フェニル)-5-ビ	継 続	武田薬品工業	愛知農総試園 研	継	試験例数不足

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名・ 商品名〕	剤型	有効成分および含有率	新・継 の 別	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
(つづき)	わい化剤 エーレスト (旧アンシ ミドール)		リミジンナタノール 0.025%					
	(2)ベンジル アミノプリン(BA) (わき芽生 育促進剤)	ペース ト	6-ベンジルアミノプ リン 0.25% 0.5#	継 続	興 人	神奈川園試, 愛知農総試園 研	実	・0.25~0.5 %ペースト 切口塗布
14. パラ	ベンジルア ミノプリン (BA) (わき芽生 育促進剤)	ペース ト	6-ベンジルアミノプ リン 0.25% 0.5#	継 続	興 人	神奈川園試, 愛知農総試園 研	実	・0.25~0.5 %ペースト (切) 傷口塗布

Ⅳ. 前回未検討・生育調節剤

作物名 〔作型・ 栽培法〕	薬剤名 〔種類名・ 商品名〕	剤型	有効成分および含有率	実 施 年 度	委託者名 (会社)	担当場所	今回 判定	判定理由または 内容
1. イチゴ 〔子苗床〕	ヒドロキシ イソキサゾ ール 〔発根, 生 育促進剤〕 タチガレン	粉	3-ヒドロキシ-5- メチルイソキサゾー ール 4%	S49 春夏作 (新規)	三 共	栃木農試佐野 分場, 岐阜農 試, 福岡園試	継	試験年次不足
2. カブ 〔マルチ〕	ヒドロキシ イソキサゾ ール 〔発根, 生 育促進剤〕 タチガレン	粉	3-ヒドロキシ-5- メチルイソキサゾー ール 4%	S49 春夏作 (新規)	三 共	埼玉園試 野菜試本場, 京都農研は 提出済	継	試験年次不足

I 除 草 剤

(A) 昭和49年度秋冬作試験

1. 野菜一般(基礎試験)

(1) SL-67(石原産業): 継続一試験年次不足.

成分未公開40%の水和剤で、接触型除草剤である。イネ科雑草への効果が特に大きいとされているが、予備試験の結果からは、トマト・レタス・ダイコンに対する薬害が大きいとのデータが得られている。土壌中の残効性大、移動性小というのが、申請書の記述である。

試験を担当したのは、野菜試験岡支場と久留米支場であって、前者ではハクサイ・ホウレンソウのは種後全面土壌処理(50, 70 g/a), 後者ではハクサイ・キャベツ・レタス・タマネギを用いて、定植前全面土壌・定植後株間土壌・生育期株間土壌(50, 70 g/a)の各処理を行った。その結果、盛岡では各処理とも顕著な薬害を生じ、ハクサイは発芽後本葉のい縮やねじれ、黄化などの症状を呈し、枯死するものが多く、ホウレンソウでも同様であった。これに対して久留米では、レタスにおいてのみ薬害を認め、特に定植後および生育期の処理で著しかった。レタスの薬害は収穫時まで残ったが、他の作目については異常を認めなかった。除草効果は、盛岡の場合雑草の発生が少くて判定が困難であったが、トリフルラリン乳剤(25mℓ)より効果大とされ、久留米ではトリフルラリン(25mℓ), CAT(10g)より、除草効果大で、特にナズナに効果大としている。処理時期については、定植前全面土壌処理が有望という判断であり、ハクサイ・キャベツ・タマネギ

での実用化試験をすすめている。この様に、処理時期および作目について検討の余地ありとの結果となったが、試験年次不足なので、作目を定めて試験継続と判定された。

2. キャベツ

(1) ANK-553(ANK研究会): 実用化-(夏まき露地移植栽培)定植前20~40mℓ全面土壌処理.

トリジン系30%の乳剤で、同系統の薬剤としては、トリフルラリン、ニトラリン、A-820, BAS-3921H, HOK-717, ベスロジンなどがあり、広く利用されている。非ホルモン型・吸収移行性の除草剤で、イネ科雑草に対する効果が大きく、広葉雑草にはやや劣る傾向があるとされている(実用的には十分であるが)。土壌中の残効性は中~長で、移動性は小さく、土性・温度によって影響を受けにくいという性質を持っている。昭和48年の春夏作から多数の試験が行われ、キャベツ(春~初夏まき移植)、レタス(トンネルマルチ)、タマネギ(春まき移植)、ニンジン(春~初夏まき露地)で実用化となっている。20~40mℓの定植前面土壌処理を、東京農試、神奈川園試三浦分場、岐阜農試、広島農試、熊本農試園芸支場が担当した。キャベツの生育については、東京で40mℓ処理区の生育抑制を報じているほか異常なく、収量についても処理との関係を報じたところはなかった。除草効果については、すでに多くの成績があるが、アブラナ科・ナデシコ科にやや効果不足とされた(広島)ほかは、いずれも十分な除草効果を認め、薬量下限のみが問題であった。神奈川園試三浦分場が30mℓ、岐阜が30~40mℓとしたほかは、20mℓでも実用性ありとしているので、

上記の様な形での実用化が認められた。

(2) S-28 (住友化学工業) : 実用化 —
〔夏まき露地移植栽培〕定植前20~40m/l
全面土壌処理。

有機リン系50%の乳剤で、同系統のNTN-80とともに、過去数シーズン多数の試験が行われた。多数にのぼるので作型を省略するが、レタス・トマト・スイカ・ニンジン・タマネギ・イチゴなどで実用化となっている。イネ科雑草に著しい除草効果をもち、若干の広葉雑草にやや効果がおちるが、実用的にはきわめて効果顕著であり、キャットグサにやや不足というのが、過去の実績である。土壌中の残効はきわめて長く、しばしば後作用が問題になるほどであって、移行性も砂質土を除き、きわめて小さい。温度については、低温でやや効果が高いといわれ、全体として、汎用性の大きいところに特長がある。20~40m/lの定植前全面土壌処理を、東京農試、岐阜農試、兵庫農試、広島農試、熊本農試園芸支場が担当した。キャベツの生育については、東京で高薬量での抑制を報じているほか異常なく、収量には差がなかった。除草効果は薬量の下限のみが問題であって、兵庫と広島が30m/l以上としているほかは、20m/lで十分と報告している。したがって、従来の実用例の用途拡大を認め、上記の様な処理で実用化可となった。

(3) SL-55 (乳) (石原産業) : 継続 — 試験年次不足。

成分未公開25%乳剤で、接触型の除草剤である。各科雑草に非選択的に有効であって、土壌中の残効はきわめて長く、移動性は極小とされている。昭和49年の春夏作で、キャベツ・レタス・トマト・キュウリについての予備試験が実施されている。30~40m/lの定植前全

面土壌処理を、群馬園試と兵庫農試が実施した。

キャベツの生育・収量については、両場所とも処理の影響を認めなかった。除草効果については、群馬が持続期間は30日程度であるが、その後の雑草発生が少いので、30m/lで有望、兵庫では、薬量の多い区ほど持続期間が長いので、40m/lで実用化可、30m/lは有望としている。試験年次が不足なので、継続となった。

(4) SL-55 (水) (石原産業) : 継続 — 試験年次不足。

前項薬剤の水和剤で、今年はいじめて試験された。19~25gの定植3日前全面土壌処理を、群馬園試、東京農試、岐阜農試、兵庫農試、熊本農試園芸支場が実施した。群馬で定植直後下葉の枯れこみ(すぐ回復)と、25gでのやや減収傾向が報告されたほかは、各場所とも生育・収量に異常を認めなかった。除草効果はいずれの草種にも顕著で、持続期間は35日以上(東京、兵庫)であった。この時期の葉菜類に共通のことであるが、生育が早い為に比較的早期から地表が植物体でカバーされ、雑草の生育が抑制される。したがって、処理効果が判然としないこともある(岐阜)が、本剤の効果については、いずれの場所も認めている。結論的に19~25gの定植3日前処理で実用性ありと判定されたが、試験年次不足で継続となった。本剤は、液剤と同様、ノビエ・メヒシバ・スズメノテッポウ・ハコベ・タデ・アカザ・ノミノフスマに、効果が著しいと、申請されている。

(5) SL-67 (石原産業) : 継続 — 試験年次不足。

前出の成分未公開の40%水和剤である。50~75gの定植3日前全面土壌処理が、群馬園試、兵庫農試で実施された。キャベツについては、群馬で定植後下葉の枯れこみがあつたが間

もなく回復としているほか、異常なかった。除草効果は、群馬では大きくて、持続期間23日程度(50g)~28日程度(75g)としているのに対し、兵庫では雑草の発生が無処理より8~9日遅れる程度で、トリフルラリン15m²より除草効果劣る、とみている。結論として群馬は50gでも十分と思われるが、雑草多発条件下での再検討が必至、兵庫では50~75gで有望であるが、薬量をあげて再検討としている。試験年次不足で継続となった。また群馬では、SL-55に劣るのではないかとの意見を述べている。

3. ハクサイ

(1) ANK-553(ANK研究会):継続 — 薬量を下げて再検討。

前出の薬剤で、20~40m²の、は種後全面土壌処理を、野菜試験盛岡支場、茨城園試、富山農試礪波園芸分場、岐阜高冷地農試で担当した。除草効果からさきに述べると、各場所ともに顕著な効果ありとし、持続期間も長く、20m²で十分と述べている。これに対してハクサイに対しては、いずれの場所でも著しい薬害が認められ、野菜試験盛岡では発芽後の枯死による欠株、不結球株の多発を述べ、茨城でも発芽直後からの葉のわん曲とクロロシス発生、不結球株の存在を、また富山礪波と岐阜高冷地でもほぼ同様の経過を報告している。したがって、除草効果の点を考え、薬量を下げてさらに試験を継続するという判定となった。

(2) S-57(住友化学工業):継続 — 試験年次不足。

酸アミド系25%の乳剤で、昭和46年の秋冬作で、ホウレンソウ・ニンジン・ダイコン・ハクサイについて試験されている。非ホルモン

型・移行性除草剤で、イネ科雑草に対する効果のほうが大きくとされ、土壌中の残効性は中~長、移行性は中~大に属すると申請されている。80~120m²のは種後全面土壌処理を、野菜試験盛岡支場、茨城園試、富山農試礪波園芸分場、岐阜高冷地農試で実施した。盛岡では、発芽は正常であったが、本葉がやや黄変し、柳葉状の生育を示したが、1か月後には正常に復していたとしている。これに対して、茨城では生育・収量に異常なし、富山礪波では外観上は異常はないが処理区は10~20%の減収、岐阜高冷地では生育順調で、処理区は手取り除草区より15~20%の増収としている。除草効果については、盛岡がイヌガランに対する効果が劣るので、トリフルラリン25m²に及ばず、持続期間30日程度とし、茨城はハコベにやや効果が劣るが十分実用性あり、富山礪波・岐阜高冷地は効果顕著としている。結論として、盛岡は処理後に異常降雨があったので判定保留、茨城・岐阜高冷地は有望、と実用化可、富山礪波は薬量を下げて検討と一致した判定は得られず、試験年次も不足なので、継続となった。

(3) S-97(住友化学工業):継続 — 試験年次不足。

酸アミド系、成分未公開の25%乳剤で、非ホルモン型、接触型除草剤である。イネ科雑草に対する効果のほうが大きく、土壌中の残効性は中~長、同移動性は2~3cmで中~大に属するとされているが、温度条件による効果の差はない。80~120m²のは種後全面土壌処理を、野菜試験盛岡支場、茨城園試、富山農試礪波園芸分場、岐阜高冷地農試が担当した。盛岡では前項S-57とほぼ同様の経過をたどる薬害を認めたが、茨城・富山礪波・岐阜高冷地では生育・収量に処理による差異を認めず、とし

ている。除草効果はイヌガラシ（盛岡）、アカザ（岐阜高冷地）にやや不十分という報告があったほかは、各場所十分な実用性ありとしている。盛岡での薬害はやや特異であって、初期に発生する本葉の葉身部が、一部ゆ着するというものであった。そのまま放置しても生育は特に劣らないということであり、間引きによって十分除去できる程度の発生率ということであったが、申請者の段階で再度検討することが求められた。試験結果に不一致な点があり、また薬量と関係のない収量のふれ（原因はつまびらかでないが）があるので、薬量も点も含め、試験年次不足につき継続となった。

4. ホウレンソウ

(1) S-57（住友化学工業）：継続 — 試験年次不足。

前出の乳剤で、80～120mℓの、は種後全面土壌処理が、埼玉園試入間川支場、石川農試、愛知農総試園研、広島農試、徳島農試で実施された。ホウレンソウの生育・収量については、各場所とも異常を認めなかった。除草効果は、埼玉入間川では、除草効果顕著で持続期間40日程度、その後もハコベ・タデ類が発生するのみで、イネ科雑草を全く認めずとし、石川でも40日程度の持続性ありとしている。愛知では処理後の降雨でやや結果が乱れたが、除草効果は十分と思われ、ノボロギクにやや劣るとし、その他の場所もほぼ実用的な効果ありとみている。担当場所の評価は、ほぼ同様であるが、試験年次不足なので、薬量も含め（徳島は、より高い薬量を希望）試験継続となった。

(2) S-97（住友化学工業）：継続 — 試験年次不足。

前出の乳剤で、80～120mℓの、は種後

全面土壌処理を、埼玉園試入間川支場、石川農試、愛知農総試園研、広島農試、徳島農試が担当した。ホウレンソウの発芽・生育は、徳島が高濃度処理での発芽不良（実損なし）を報じているほか異常なく、収量にも差を認めなかった。除草効果は、埼玉入間川・石川・愛知では著しい効果があって、持続期間も40～50日程度とし、広島・徳島でも対照に用いたアラクロール10mℓと同程度に有効としている。草種については、ノボロギクに対して効果がやや不足したが、特に不十分なもの認められなかった。以上の様に、実用化の可能性の大きい薬剤であると思われたが、試験年次不足で、試験継続と判定された。

5. レタス

(1) ANK-553（ANK研究会）：実用化 — （トンネル・マルチ栽培）定植前マルチ前20～40mℓ全面土壌処理。

前出の乳剤で、20～40mℓの定植前マルチ前全面土壌処理を、千葉農試南総園研、千葉暖地園試、静岡農試遠州園芸分場、香川農試、熊本農試園芸支場が担当した。レタスの生育は、千葉南総と千葉暖地でやや初期生育のおくれを認めたほかは異常なく、収量にも差はなかった。除草効果は、イネ科雑草に対する効果が千葉南総では劣り、熊本では顕著という違いはあったが、全般に高いと判定された。各場所の結果が一致しているので、上記の様な実用化の判定が与えられた。

(2) NK-049（日本化薬）：継続 — 試験年次不足。

ベンゾフェノン系50%の水和剤で、非ホルモン型・吸収移行性の除草剤である。イネ科と広葉雑草に非選択的に作用し、クロロフィル生

成を阻害する。土壌中の残効性は中、同移動性は小で、昭和48年秋冬作から試験が実施されている。60～100gの定植前全面土壌処理を、千葉農試南総園研、静岡農試遠州園芸分場、熊本農試園芸支場が実施した。千葉南総では、定植後葉に黄はん点を生じ、葉量が多いほどその程度大であったが、10～15日で外観的には正常となった。高葉量では初期収量が減少している。その他の場所では、処理に起因する異常を認めなかった。除草効果は広葉雑草に対して顕著であったが、低葉量ではスズメノテッポウにやや効果が低下した。しかし全般的に十分実用的な効果ありと認められた。以上の様に、除草効果高く、実用化の可能性が高かったが、本剤のレタスでの試験が初めてであること（タマネギ、イチゴで試験あり）、千葉南総での葉害が、試験箇所数の少ないことから、重視されたことなどあって、試験継続となった。

(3) NK-049（日本化薬）：継続 — 試験年次不足。

前項の薬剤で、60～100gの定植後うね間株間処理を、同様の3場所で行った。レタスに対する影響は前項と同様であり、除草効果についても同様であった。したがって、試験年次不足で継続との判定が与えられた。

(4) NTN-80（日本特殊農薬製造）：実用化 —〔露地移植栽培〕定植前25～50g全面土壌処理。

有機リン系60%の水和剤で、昭和48年春夏作（乳剤）、同秋冬作（水和剤）以来、多数の試験例があり、キャベツ・レタス（露地マルチ移植、トンネルマルチ移植）、キュウリ・ニンジン・タマネギ・イチゴなどで（複数の作型を含み）実用化となっている。きわめて汎用性に富む薬剤であるが、キク科に若干効果がおち

るほか、草種を問わず除草効果顕著であり、土壌中の残効は最長のグループに属する。土壌中の移行性も小さく、むしろ後作用の懸念されることがある。25～50gの定植前全面土壌処理を、千葉農試南総園研、静岡農試遠州園芸分場、香川農試が実施した。レタスの生育・収量に処理による差はなく、除草効果についても、従来の試験同様顕著であり、草種ではスズメノテッポウ・オヒシバに顕著な効果を認めたのに対し、ノミノフスマでやや効果がおちる（香川）という報告があったほかは、非選択的に有効であった。以上の結果から、25～50gの処理で、実用化可と判定された。

(5) S-28（住友化学工業）：実用化 —〔露地移植栽培〕定植前20～40m²全面土壌処理。

前出の薬剤で、20～40m²の定植前全面土壌処理を、千葉農試南総園研、静岡農試遠州園芸分場、香川農試、福岡園試、大分農技センターで実施した。千葉南総では、40m²でやや生育が抑制され、収量も無処理より下ったが、他は異常なかった。その他の場所では、生育・収量ともに処理による影響を認めなかった。本剤はすでに多数の試験例があるので、除草効果には、同系統のNTN-80同様定評があるが、各場所とも各葉量で顕著な除草効果を認め、むしろ低葉量で実用化可との評価をしている。したがって、上記の葉量で実用化可と判定された。

(6) S-28（住友化学工業）：実用化 —〔トンネルマルチ移植栽培〕定植前、マルチ前20～50m²全面土壌処理。

前項薬剤のトンネルマルチ移植栽培での試験である。この作型については、すでに昭和48年の秋冬作において、30～50m²の定植前マルチ前全面土壌処理で実用化可の判定を得て

いる。その時定植時のかん水量やかん水方法によっては、若干の生育抑制がありうるとの指摘があり、同時に30 m²以下の薬量でも有効なのではないかとの意見が出された。今回の試験は、その点を再検討するために、薬量を20～40 m²に下げて、再度実施されたものである。試験の企画者として、申請者の意図するところを大いに評価したい。試験を実施したのは、前項の露地移植栽培と同様の5場所である。試験結果は、レタスの生育・収量には各場所とも異常なく（今回あっては困るのであるが）、除草効果は20 m²でも対照薬剤のトリフルラリン25 m²処理と同等かそれ以上の効果あり、持続期間60～70日（福岡）との結果が得られた。したがって、20～40 m²の定植前マルチ前処理で実用化可能であり、前回の判定と合わせて、薬量の幅を20～50 m²として、実用化可の判定が与えられた。

6. タマネギ

(1) DAC-893（昭和ダイヤモンド化学）

：実・継 実用化—〔苗床〕は種後80～130 g 全面土壌処理。継統一土性・薬量と薬害の関係について。

安息香酸系75%の水和剤で、昭和43年に試験されて以来、キャベツ・レタス・ラッキョウ・タマネギ（本畑）・イチゴ・ニンジンで実用化となっている。周知のようにアメリカでは汎用性のある野菜用除草剤として用いられており、わが国でも早くから試験されているが、何分にも水和剤としては、きわめて（？）多量の薬量が用いられるものであり、また申請者が再三変更されたことなどもあって、近年まで実用化されるものが少なかった。以上の実用化例は、すべて昭和47年の秋冬作以後のものである。

非ホルモン型・吸収移行型の薬剤で、イネ科雑草に高い除草効果を持ち、広葉雑草への効果はおちるとされている。残効性は36～40日、土壌中の移行性は0～1 cmと小さい。強アルカリ性の農薬との混用は不可となっている。また、キタ科・アブラナ科雑草に対する効果が劣ることも、注意が必要である。今回の試験はタマネギの苗床に対する試験であって、この目的にそう薬剤は、多くの試験が行われ、一応の実用化候補といえるものがありながら、結局薬害の点などで、確実なものが出ていなかったといえてよい。試験を実施したのは、岐阜農試、和歌山農試、兵庫農試、香川農試、佐賀農試で、80～130 gのは種後全面土壌処理が実施された。その結果、岐阜・和歌山・兵庫では発芽・生育に異常を認めず、上苗率も相当に向上（岐阜では44%）するとしている。これに対し、香川では異常はないが除草効果不足で減収、佐賀では発芽時に接触害があり、症状は30日程度で消失したが、高薬量では減収、低薬量では除草効果不足で減収との結果となった。除草効果については、もともとイネ科雑草に対する効果の優先する薬剤なので、ナズナ・タネツケバナなどへの効果不足（香川）、タネツケバナ・イヌガラシ・アレチノギクに効果不十分（佐賀）などとの結果が報告されたが、各場所ともにイネ科雑草に対する効果の著しいことは認めるとの結果となった。検討会においては、この様な効果の面より、本剤の薬量の多いことへの不満について、長時間の論議があったが、結局、イネ科雑草がタマネギの苗床で大きな問題であること、処理によって相当程度に広葉雑草も抑草されること、それにもまして現在タマネギ苗床用の適当な除草剤がないので、この程度の薬剤であっても、当面は実用価値の大きいこと、な

どの評価が多数を占め、上記の様な判定が与えられた。しかし佐賀の薬害については、適確な判断が下し得ず、土性に起因するのではないかと考えられたので、再度検討する様にとの、試験継続事項が併記されることになった。

7. タマネギ（本畑）

(1) A-820（2,4-D協議会）：実・継
實用化一〔秋まき移植栽培〕定植後および春季
雑草発生前20～40m²反復全面土壌処理。
継続一地域性（場所数増）および体系処理につ
いて。

トルイジン系48%の乳剤で、ANK-558
と同系統の非ホルモン型吸収移行性の除草剤で
ある。特に選択性はないが、イネ科雑草への効
果が大きいとされている。効果の持続期間は、
40～50日程度、土壌中の移行性は小さい。
昭和47年春夏作から試験が始まり、キャベツ
・タマネギ・ニンジンで實用化の判定を得てい
る。20～40m²の定植後および春季雑草発
生始期反復全面土壌処理が申請され、長野園試、
和歌山農試、佐賀農試が試験を実施した。タマ
ネギに対しては、各場所ともに異常を認めず、
除草効果についても各場所顕著としている。草
種については、イヌビエに対する効果他剤より
劣るがシロザに対する効果大（長野）、イネ
科雑草に効果大であるが、それに比べるとイヌ
ガラシ・タネツケバナに対する効果がおちる（佐
賀）などの指摘があった。しかし、反復処理に
よって十分實用化ありとの判定が与えられた。
なお冒頭に述べた様な次第で、体系処理の検討
が述べられた。

(2) ANK-553（ANK研究会）：実・継
實用化一〔秋まき移植栽培〕定植後40～
50m²全面土壌処理。継続一薬量と体系処理

について。

前出の薬剤で、30～50m²の定植後全面
土壌処理が、愛知農総試園研、長野園試、岐阜
農試、兵庫農試淡路分場、福岡園試によって実
施された。その結果、愛知で50m²区での減
収が認められたほか、タマネギには異常なく、
除草効果も場所による差がなかった。すなわち、
愛知できわめて高い除草効果を認め、効果の持
続も30m²区が2か月、40、50m²区が
6か月にも及ぶとしているが、他場所もほぼこ
れと同様の効果があり、春季雑草にも効果が十
分に及ぶとの結果を得ている。以上の結果から、
薬量については、持続効果を考慮して40m²
以上としての實用化可との判定が与えられた。
しかし一回処理によって、春季雑草まで抑草す
るということには、当然薬量や残効の点で問題
も出ることと考えられるので、1回の処理量を
低減するという方向で、他剤との体系処理を検
討するというコメントがつけられた。

(3) NK-049（日本化薬）：実・継 実
實用化一〔秋まき移植栽培—水田裏作〕活着後
80gおよび春季雑草発生前80～100g反
復全面土壌処理。継続一雑草々種について。

前出の薬剤で、昭和48年の秋冬作でタマネ
ギについての試験が実施されている。今回の試
験では、秋処理に本剤の80gまたはプロメト
リン20gを施し、春処理に本剤80～100
g（プロメトリンの時は80gのみ）を施す処
理が検討された。試験を担当したのは、愛知農
総試園研、岐阜農試、和歌山農試、兵庫農試淡
路分場、香川農試、福岡園試、佐賀農試である。
その結果、プロメトリンとの体系処理区は、香
川を除いて、いずれも薬害又は生育の抑制が認
められたが、本剤のみの反復処理区は、手取り
区と同等又はそれ以上の収量が得られた。除草

効果は、タデ科のミチヤナギに効果なし（岐阜）、タデの多いほ場で実用性疑わし（香川）などとの結果や、ヒエ類に対して卓効あり（兵庫淡路）などのコメントもあったが、全体としては反復処理で高い除草効果が認められ、実用化可と判定された。しかし、以上の様に草種についてのコメントが若干ついているので、その点をさらに検討することとし、特にタデについては、処理時期によって効果の異なること（発芽直前か直後に感受性大）が知られているので、現栽培体系の中での適期処理の可能性を重ねて検討するということになった。

(4) NP-24（日本曹達）：継続 — 試験年次不足。

ビラン系40%の水和剤で、非ホルモン型・吸収移行性の薬剤である。本剤はイネ科雑草にきわめて高い効果があり、広葉雑草には効果がないという、いわば混合使用あるいはイネ科雑草のみの優占するほ場や、作期を対象とした薬剤であって、土壌中の残効は冬季30日程度、極低温時には効果が劣るとされている。また土壌中の移行性は30mm降雨で5~6cmという、大きな部類に属している。今回の試験も、水田裏作など、イネ科優占ほ場での効果を確認したいとの目的をもっている。40~60gの定植後全面処理の試験を、岐阜農試、和歌山農試、福岡園試、佐賀農試が実施したが、いずれにおいても、タマネギの生育・収量に差は認められなかった。除草効果は、申請書どおりで、ナズナに効果がない（岐阜）、ハハコグサ、ハナイバナ、ノミノフスマ、タネツケバナに効果がない（和歌山）、広葉雑草に無効（福岡）、ニワヤナギ、イヌタデ、イヌガラシ、タネツケバナに無効（佐賀）となっているが、イネ科雑草にはいずれも高い除草効果を認めており、そ

の場合の効果持続も70~80日という例（佐賀）、30~40日（福岡）という例が報告される。したがって、試験結果は申請書どおりであるが、試験年次不足につき継続と判定された。

(5) NTN-80（日本特殊農薬製造）：実用化 —〔秋まき移植栽培〕定植後30~50gおよび春季雑草発生前40g反復全面土壌処理。

前出の薬剤であるが、タマネギについては、この処理方法で昭和48年秋冬作において、実用化可の判定を得ている。今回の試験は、その結果を再度確認するために実施されたものである。試験を実施したのは、岐阜農試、香川農試、佐賀農試であって、タマネギの生育・収量、除草効果について、前回と同様の成績が得られた。したがって、昨年通りとの判定が与えられている。

(6) PL（丸和バイオケミカル、北興化学工業）：継続 — 試験年次不足。

ウラシル系のレナシル40%、ダイアジン系のPAC30%の混合剤で、ほぼ同系統の薬剤を混合したものである。レナシルは非選択的な薬剤であり、PACはイネ科雑草に対する効果の大きい薬剤であるが、その結果非選択的に除草効果の大きい除草剤となっている。効果の持続もレナシルに似て、きわめて長いものとなっているが、反面砂質土壌で薬害が出やすいという欠点もある。昭和48年から野菜での試験が開始されて、ハウレンソウで実用化となっている。タマネギについても試験があるが、寒地での試験であって、秋まき移植栽培では、はじめてである。7.5~10gの活着後全面土壌処理を、和歌山農試、兵庫農試淡路分場、佐賀農試で実施した。兵庫淡路と佐賀では、タマネギに

薬害なく、収量にも差はなかったが、和歌山では薬量に平行した薬害（生育抑制）を認め、それに応じた減収をみている。除草効果は、対照としたCIPCと同程度という結果を各場所とも得ており、抑草期間もほぼ同等あるいはまさるという程度であったが、春季雑草に対してやや不足とする意見が多かった。タマネギ（秋植）に対しては、試験年次不足なので、継続と判定された。

(7) S-28（住友化学工業）：実用化 — 〔秋まき移植栽培〕定植後および春季雑草発生前20～40m²反復全面土壌処理。

前出の薬剤で、20～40m²の定植後および春季雑草発生前反復全面土壌処理を、長野園試、岐阜農試、兵庫農試淡路分場、香川農試、佐賀農試が実施した。長野・兵庫淡路・香川では、タマネギの生育・収量に異常なかったが、岐阜では秋・春の両処理とも、葉身のねん曲する薬害を生じた。しかしやがて正常に復し、低濃度では手取り除草区をこす収量となった。佐賀では春処理の高濃度区が類似の症状を呈したが、この場合も30日程度で旧に復し、低濃度では手取り区より増収となっている。除草効果は、いずれの場所においても顕著であったが、シロザ、イヌビユ、タデに対する効果は十分でなかった。以上の様な結果で、薬害に対する評価が問題となったが、実害が認められていないので、薬量に対して注意すればよいということで、実用化の判定が与えられた。

(8) SKH-01（シェル化学、石原産業）実・継 実 — 〔秋まき移植〕10～15g活着後全面土壌処理。継 — 薬量および体系処理について。

トリアジン系の50%水和剤で、非ホルモン型・移行性の薬剤、ヒル反応阻害作用をもって

いる。広葉雑草に対する除草効果が、イネ科雑草に対するよりも大きく、ツクサには効果が劣っている。土壌中の残効は28日以上で、中～長に属し、移行性は1～2cmで小の部に属しているが、砂質土壌では薬害のおそれがあるとされている。野菜については、昭和47年の秋冬作から試験が始まり、タマネギでも試験されている。前回の試験では、秋春の反復処理が行われているが、今回は5～15gの活着後全面処理を行い、秋雑草への効果を明らかにし、他薬剤による春処理との体系処理の可否を検討しようとしたものである。岐阜農試、和歌山農試、兵庫農試淡路分場、香川農試、佐賀農試が担当したが、タマネギに対しては、和歌山で軽度の生育抑制をみた（すぐに回復）ほか異常なく、収量にも差はなかった。除草効果は、申請のとおり広葉雑草に対して高く、イネ科雑草や春タデに対しては効果不足というのが大部分であったが、佐賀農試のみはイネ科雑草に対して卓効あり、ニワナギ・イヌガラシなど広葉雑草に劣るとの結果を得ている。以上のような結果で、和歌山の薬害について若干問題が残るが、前年度試験の秋処理では薬害がなく、除草効果も高かったので、秋処理については実用化とし、薬量（低薬量）および、他薬剤による春処理との体系処理について、継続という判定が与えられた。

（検討会においては、前年度試験が反復処理であり、今回は秋のみの処理で、内容が異なるため、試験年次不足との判定が与えられた。その後、今回の試験は、秋処理の効果を検討しようとしたもので、2回目に当たるとの異議申請があり、中央委員の間で検討した結果、上記の様な判定に改められた。）

(9) SL-38（石原産業）：継続 — 試験

年次不足.

2 — エトキシ — 2,3 — ジハイドロ — 3,
3 — ジメチル — 5 — ベンゾフラニルメタ
ン — サルフォネートを20%含有する乳剤で、
吸収移行性の除草剤である。100~150m²
の定植後うね間土壌処理を、兵庫農試と福岡園
試で担当した。その結果、兵庫では生育・収量
に異常を認めなかったが、福岡では翌年2月
中、下旬になって、下葉の黄化と枯れこみがあ
らわれ、3月下旬から展開する新葉がねん曲し、
若干生育も抑制された。収量も高薬量で低下す
る傾向を示した。除草効果も、4月上旬まで十
分(兵庫)と、持続期間30~40日で春季の
効果不十分(福岡)とに分かれた。したがって
評価も反対となったが、試験年次が不足する
ので継続と結論された。

(10) SL-55(乳)(石原産業):継続
— 試験年次不足.

前出の成分未公開25%の乳剤で、30~
40m²の定植後うね間土壌処理を、兵庫農試
が実施した。タマネギの生育・収量に異常なく、
除草効果も4月上旬まで、持続したが、試験年
次不足につき継続と判定された。

(11) SL-55(水和)(石原産業):
継続 — 試験年次不足.

前出の成分未公開40%の水和剤で、19~
25gの定植後うね間土壌処理を、静岡農試、
愛知農総試園研、兵庫農試、福岡園試で実施し
た。その結果、愛知と兵庫では外観的な被害は
認められないが、収量は処理区がいずれも減収
とし、静岡と福岡では処理区でやや生育抑制が
認められて、収量も減という結果を得ている。
除草効果については、各場所ともに顕著との結
果を得ており、収穫期まで持続(静岡、愛知、
福岡)、4月上旬まで有効(兵庫)となってお

り、草種による差も認められなかった。その結
果各場所とも、供試薬量で有望なれども、より
減量しても十分の効果が期待できるので、その
点について再検討を望むと述べている。試験年
次も不足なので、これらの点を含んで、試験継
続と判定された。

8. イ チ ゴ

(1) ANK-553(ANK研究会):継続
— [露地マルチ栽培]試験例数不足(薬量に
ついて再検討)。

前出のトルイジン系30%の乳剤で、キャベ
ツ・レタス・タマネギ・ニンジンで実用化とな
っている。露地マルチ栽培での20~40m²
の定植後マルチ前全面土壌処理を、神奈川園試、
兵庫農試但馬分場、福岡園試が担当した。イチ
ゴの生育・収量については、各場所とも処理に
よる差を認めなかった。除草効果については、
各場所とも相当に高いことを認めたが、春季雑
草に対する持続性について疑問との場所(福岡)
があり、又関西で一般的な黒マルチ処理に比
べて、きわだったメリットがあるかとの議論もあ
って、最終的には、この様な関東から九州に分
布する3個所の試験からは結論を下しがたいと
の意見が強く、試験継続と判定された。

(2) ANK-553(ANK研究会):継続
— [ハウス・トンネルマルチ栽培]試験例数
不足(薬量について再検討)。

前出の薬剤で、半促成栽培での、20~40
m²活着後マルチ前全面土壌処理が、栃木農試、
東京農試、神奈川園試で試験された。前項同様、
イチゴに対する影響は認められなかったが、除
草効果もほぼ共通して高く、草種による差も認
められなかった。しかし、イチゴに対する試験
としては、はじめてであり、試験個所数が少な

いうえ、関西地方の黒マルチ栽培との関係などを考慮すると、これを一般化するのは疑問であるとの意見が強く、薬量を下げる方向も含めて試験継続と判定された。

(3) B-3015 (クミアイ化学工業) : 継続 — (露地マルチ栽培) 試験結果不一致 (薬量・薬害について再検討)。

カーバメート系50%の乳剤、非ホルモン型で、イネ科雑草に対する除草効果大きく、しかもイネ科雑草に属間選択性をもつことで知られている。土壤中の残効性は長く、移行性中～小、水田用としてきわめて評価の高い薬剤である。野菜については、昭和46年の春夏作から試験が始められており、レタスの各種作型で実用化となっているが、イチゴについては今回は初めての試験である。露地マルチ栽培での、80～100m²定植前・マルチ前全面土壌処理が、愛知農総試験園研、岐阜農試、兵庫農試但馬分場、佐賀農試、長崎総農試で実施された。岐阜、兵庫但馬、佐賀、長崎では、イチゴの生育に異常を認めず、収量にも処理による差はないとしているが、愛知では定植10日後ごろから下葉の枯れる薬害を認め、収量も低下したとしている。除草効果は、本剤がもともと効果持続期間の短い薬剤であることを反映してか一致していない。すなわち、愛知では、秋冬雑草に対する効果大で、1月まで顕著に抑草し、草種ではスズメノテッポウ、ミミナグサに対しては顕著であるが、ハコベとギンギンには劣ると報じているのに対し、兵庫但馬では除草効果が余り認められず、雑草害のために処理区がむしろ減収すると述べている。またその他の場所では岐阜が効果十分(ハコベには劣る)、佐賀はイネ科雑草には効果大であるが、ニワヤナギ、タネツケバナ、ノミノフスマには劣る、長崎では

効果の持続不足を述べている。この様に、薬害の認められた場所があるうえ、薬量と除草効果および薬害との関係が判然としないとの結果が得られたので、イチゴに対して初年度の試験である点も考慮して、試験継続との判定が与えられた。

(4) B-3015 (クミアイ化学工業) : 継続 — (トンネルマルチ栽培) 試験結果不一致 (薬量・薬害について再検討)。

前項薬剤の、トンネルマルチ栽培での試験で、80～100m²の定植前・マルチ前全面土壌処理を、愛知農総試験園研、岐阜農試、兵庫農試但馬分場、佐賀農試、長崎総農試が担当した。イチゴの生育・収量に対する影響は、前項の露地マルチ栽培におけるそれと全く同様であった。除草効果は、愛知が抑草期間長く、1回処理で収穫までカバーできる、岐阜がハコベには低薬量で効果劣るが、イネ科雑草には十分、兵庫但馬が除草効果劣り、処理区は収量減、佐賀はマルチまでの除草効果は認めるが、以後の雑草発生が急激で持続性不足、長崎は生育後期の効果不十分、というようにわかれた。露地マルチの場合と同様の理由で、薬量を中心に試験継続と判定された。

(5) B-3015・P (クミアイ化学工業) : 継続 — (露地マルチ栽培) 試験年次不足 (薬量・薬害について再検討)。

前項の薬剤に、トリアジン系のプロメトリンを加え、前者のイネ科雑草に対する効果と後者の広葉雑草に対する効果との、複合的效果を期待したものである。野菜に対する試験は、今回のイチゴの試験が最初である。露地マルチ栽培について60～100m²の定植前・マルチ前全面土壌処理を、前項と同様の試験場が実施した。その結果、長崎を除いた各場所で、定植後

軽いもので葉の黄変から重いもので葉の枯死に至る接触害的な症状が現われた。そして、それら症状の軽重に応じた減収が認められている。B-3015単剤の時の結果から考慮して、これらの症状は、プロメトリンの添加によって招来されたものと推察された。除草効果は、プロメトリンの添加によって、一段と顕著なものとなっており、草種に関係なく（佐賀は広葉雑草にやや劣るという）除草効果が発揮され、効果の持続期間も4月上旬まで有効とされている。このように、薬害が増した点で、プロメトリンの添加そのもの、あるいは双方の薬量に問題があると思われる結果が得られた。試験年次も不足なので、薬量・薬害を中心に試験継続と判定された。

(6) B-3015・P（クミアイ化学工業）：継続 —〔トンネルマルチ栽培〕試験年次不足。

前項の薬剤の、トンネルマルチ栽培での試験であって、60～100m²の定植前・マルチ前全面土壌処理を、前項と同様の試験場で実施した。結果は、露地マルチ栽培の場合と同様で、特に薬害の程度は一層著しくなった。除草効果については、薬量による差が認められたくらいに顕著であった。したがって、前項と同様の理由で、薬量と薬害に注目しつつ、再度検討をつづけるという判定が与えられた。

(7) NTN-80（日本特殊農薬製造）：実用化 —〔ハウスまたはトンネルマルチ栽培〕定植後30～50gおよびマルチ前40g反復株間土壌処理。

前出薬剤の用途拡大試験で、栃木農試、埼玉園試、佐賀農試が、定植後30～50gおよびマルチ前40gの反復株間土壌処理を実施した。イチゴに対しては、各場所とも異常を認めず、

収量は対照区と同様であった。除草効果は、佐賀が、マルチ前の処理効果に比べて、マルチ後の持続期間が短いと指摘しているのを除くと、ほぼ十分と判断された。佐賀の場合も積極的なマイナスではないので、上記の様な形での実用化可との判定が与えられた。本剤は露地マルチ栽培において、同じ薬量による反復処理が実用化となっているので、用途が広がったことになった。

(8) S-28（住友化学工業）：実用化 —〔トンネルマルチ（促成）栽培〕定植後およびマルチ前20～40m²反復全面土壌処理。

前出薬剤の用途拡大試験で、定植後およびマルチ前20～40m²反復全面土壌処理を、野菜試久留米支場、栃木農試、神奈川園試、福岡園試、大分農技センターが実施した。その結果、各場所とも薬害を認めず、収量にも差はなかった。除草効果は、すでに多くの実績があるが、久留米では収穫終了まで雑草を認めず、神奈川でも同様で、他の2場所も効果顕著と述べている。したがって、試験実施の処理法で実用化可と判定された。

(9) S-28（住友化学工業）：実・継続実用化—〔ハウスマルチ栽培〕定植後およびマルチ前20～40m²反復全面土壌処理。継続 — 品種・処理時期と薬害について。

前出薬剤の用途拡大試験で、定植後およびマルチ前20～40m²の反復全面土壌処理を、栃木農試、千葉暖地園試、神奈川園試、福岡園試、大分農技センターで実施した。イチゴについては千葉暖地が、接触した場合の葉の黄化を認めているほかは異常なかった。除草効果も前項とほぼ同様で、収穫終了まで完全に、あるいは実用上支障ない程度の持続効果が認められている。したがって、処理方法どおりの実用化が

可と認められた。

(10) SL-38 (石原産業) : 継続 — 試験年次不足。

前出の薬剤で、ハウスマルチ栽培における、100~150m²の定植前・マルチ前全面土壌処理を、福島園試いわき支場、福岡園試で実施した。福島いわきでは、外観上の生育に異常はなかったが、総収量がやや減収となった。福岡では、ビニール被覆の2月上旬から、新葉および花房に‘ちぢみ’や‘よじれ’が出て、生育が一時的に抑制され、収量は高濃度区で減少した。除草効果は、福島いわきでは顕著であったが、福岡ではイヌガラシに効果の劣ることが影響して、全体としての除草効果が十分でなかった。以上を総合して、処理濃度と他剤との体系処理が必要とされたが、試験としては年次不足なので、継続と判定されている。

(11) SL-55 (乳) (石原産業) : 継続 — 試験年次不足。

前出薬剤で、ハウスマルチ栽培での定植前・マルチ前全面土壌処理(30~40m²)が、福島園試いわき支場、埼玉園試で実施された。福島いわきでは外観上の被害は認められなかったが、初期収量・総収量ともに減収となっている。埼玉では定植後20日ごろから、葉に赤かった色のはん点が現われ、高濃度区ほど減収としている。除草効果は、いずれの場所でも高く、収穫時まで少量の雑草しかみないほどであった。試験年次不足につき継続と判定された。

(12) SL-55 (水和) (石原産業) : 継続 — 試験年次不足。

前出の薬剤で、前項と同様の処理を、19~25gの薬量で実施した。担当したのは、福島園試いわき支場、奈良農試、福岡園試である。イチゴについては3場所ともに、処理による影

響を認めなかった。除草効果については、いずれも顕著なことを認めたが、効果の持続期間については若干の不一致があった。すなわち、福島いわきでは100日以上で、3月末の調査打ち切り時まで抑草したとしているのに対して、福岡では45~50日程度は著しい抑草力を示すが、その後急激に雑草が発生するとしている。処理後の条件の差によるものと思われるが、試験年次不足につき、継続と判定された。

(13) U-67 (水和) (日本アップジョン) : 実用化 — [露地マルチ栽培] 定植後およびマルチ前(各)30~40g 反復全面土壌処理。

旧名称U-27・267の薬剤で、酸アミド系75%の水和剤である。旧名称で多数の試験が、昭和46年の秋冬作から行われており、トマト、イチゴ、キャベツで実用化となっている。今回の試験は、イチゴでの作型拡大である。本剤は、ナス科・バラ科に対して選択性があり、イネ科雑草およびカタリグサ科に著しい効果を持っている。土壌中の残効性が、きわめて長いという性質があり、土壌中の移行性は小さい方に属する。定植後およびマルチ前各30~40g 反復全面土壌処理を、野菜試久留米支場、静岡農試、奈良農試で実試した。イチゴに対しては、各場所とも処理の影響を認めず、除草効果についても、反復処理によって、十分な実用性ありと認められている。したがって、試験の処理法によっての実用化可と判定された。

(14) U-67 (粒) (日本アップジョン) : 実用化 — [露地マルチ栽培] 定植後およびマルチ前(各)300~400g 反復全面土壌処理。

前項薬剤の剤型を変えたものであって、300~400gの同様処理法を、同一の試験場で実施した。結果は水和剤の場合とほとんど同様で

あり、静岡が低薬量の場合の散布むらと、うね肩部に処理した薬剤がみぞに落下することのあることを指摘した点だけが異った。したがって、処理した方法での実用化が可能であるとの判定が与えられた。

(15) C₆-IPC・CP-50144 (日産化学工業、日本モンサント) : 保留 — 全実施場所の試験完了をまって判定。

周知の薬剤の混合による、効果の相乗的増大を狙ったもので、15～20 m²/haの定植後および春季雑草発生前反復処理が、北海道中央農試原々種農場および同道南農試で実施された。検討会の時点では、なお収量調査未了であったため、両場の最終成績提出をまって、改めて判定するということとし、今回は判定を保留した。

9 ニンジン

(1) S-28 (住友化学工業) : 実・継続
実用化 — [冬まきトンネルマルチ栽培] は種前・マルチ前20～40 m²/ha全面土壌処理、継続 — 温度と薬害について。

前出薬剤で、20～40 m²/haのは種前・マルチ前全面土壌処理を、野菜試久留米支場、埼玉園試入間川支場、東京農試、香川農試、長崎総農試が実施した。野菜試久留米、東京、香川、長崎では、各薬量とも薬害なく、生育・収量にも差はなかった。しかし埼玉入間川ではトンネル内が高温となったため、高薬量で著しい発芽不良を認めた。発芽後の生育も、薬量に応じて抑制されたが、間引き後は次第に回復し、最終的には対照区より増収となった。除草効果は、他作目の場合と同じく、低薬量でも実用的に十分な効果が認められ、いずれも収穫時まで実質的に除草を要しないほどであった。したがって、埼玉入間川の指摘する温度と薬害の点について、

試験をつづけることとし、他の部分については処理法どおりで実用化可能と判定された。

(2) トリフルラリン(乳) (武田薬品工業) : 実用化 — [冬まきトンネル栽培・表面処理] は種後20～40 m²/ha全面土壌処理。

周知のトリイジン系の代表的除草剤・粒剤については、すでにこの処理法で実用化となっている。は種後20～40 m²/haの全面土壌処理を、埼玉園試入間川支場、千葉農試、愛知農総試園研、徳島農試が実施した。その結果、埼玉入間川と徳島で、高薬量の場合実損のない初期生育の抑制があったが、収量には影響なかった。除草効果は、実績のある薬剤であるが、ザクロソウ、スベリヒユ、スカシタゴボウなどの広葉雑草々種を除き、顕著な効果があった。混和処理より効果が劣るという意見もあったが、実用的には試験した方法で可ということで、実用化可の判定が与えられた。

(3) トリフルラリン(乳) (武田薬品工業) : 実・継続 実用化 — [冬まきトンネル栽培・混和処理] は種前15～35 m²/ha全面土壌混和処理、継続 — 土性と効果について。

前項の薬剤で、この処理法は春まき露地栽培で実用化となっているが、薬量が15～25 m²/haであり、またトンネル栽培での試験はない。今回は、15～35 m²/haのは種前混和処理を、埼玉園試入間川支場、千葉農試、愛知農総試園研、徳島農試で実施した。この処理法ではガス化による害が懸念されたが、各場所ともその様なこともなかった。除草効果については、埼玉入間川と千葉が、効果の不足する草種のあることなどについて問題点を指摘してはいるが、全体として効果ありとしているのに対し、愛知園研と徳島ではきわめて除草効果劣ると判定している。その理由としては、十分な混和がこれらの試験

場の場合でできなかったということであって、従来問題になってきたことと同様の原因によっている。沖積土とこう積土の違い、水田裏作と畑地の差、あるいは処理手段（機械か人手か）による差など、従来も指定の深さに、均一に処理することは、しばしば困難とされてきたが、愛知の様に、耕耘機による混和处理は実用化の望みはないであろうと、ほぼ断定的な判断を与える場所もあった。これらの点はすでに各作目について、混和处理の問題として、本剤に限らず議論されてきたことであるので、一応実用化の可能な部分については、可の判定を与え、土壌条件については、普及の可能性という意味で、試験を継続することとなった。

(B) 前回検討未了成績

1. ネギ（苗床）

(1) DAC-893（昭和ダイヤモンド）：実・継 実用化 —（春～初夏まき露地栽培）は種後110～150g全面土壌処理。継続 — トンネル育苗について再検討。

前回検討未了の静岡農試の成績が検討され、5月30日には種したが、6月25日に集中豪雨で調査不能になったとの報告があった。その時点までは生育に異常なく、イネ科雑草に対する除草効果大で、広葉雑草にはやや不足する様にみられた。（前回判定を再確認。）

2. ネギ（本畑）

(1) U-67（日本アップジョン）：継続 — 試験結果不一致。

茨城農試、埼玉園試、三重農技センターの成績が検討済みで、結果不一致であったが、今回は静岡農試と福岡園試の成績が検討された。静

岡では低湿ほ場であったが、処理（9月6日）8か月後の伸長期に薬害による生育抑制とみられるものが出た。収量も高薬量で50%減となり、根の生長が著しく阻害されていた。福岡でも11月20日処理したものが、12月中旬に至って著しく生育阻害をうけ、葉が枯れこんで収量激減して、商品となる収穫物がほとんどなかった。除草効果は両場所とも顕著であり、翌春まではほぼ完全に抑草するとしているが、薬害が著しいので、試験継続とされた前判定と同様の処置となった。

3. ニンジン

(1) A-820（2,4-D協議会）：実用化 — は種後30～40m全面土壌処理。

前回埼玉園試入間川支場、香川農試、大分農技センターの成績が検討されて、上記の様に実用化となった。残った徳島農試の成績で、発芽・生育には異常なかったが、除草効果不足で減収になったとしている。除草効果はイネ科雑草に対するそれが不足なのであって、シロザ・タデについても十分でなかった。効果の持続性も短いので、薬量をあげての再検討が必要としている。上記の実用化判定があるので、普及段階で、実用量をきめるということになった。

Ⅱ 生育調節剤

(A) 昭和49年度秋冬作試験

1. タマネギ

(1) ヒドロキシイソキサゾール（三共）：継続 — 試験例数不足。

タチガレンの商品名で知られる、イネの苗立枯病防除剤で、各種作物の根の呼吸活性を高め、

品質向上に有効とされている。昭和49年の春夏作から、タマネギ・イチゴ・カブで試験されている。今回の試験は、愛知農総試園研、兵庫農試淡路分場、佐賀農試が担当し、苗床への、 $25 \sim 75 \text{ g/m}^2$ は種前全面土壌混和处理が行われた。その結果、佐賀では処理区の発芽率、草たけがまさり、根群の発達もよく、上苗率も向上し、活着も改善される結果、 $15 \sim 16\%$ の増収が認められたとしている。これに対して兵庫では、健苗率が向上し、苗の生育改善には効果がなく、実用性疑問、愛知では処理による変化を認めず、は種を適期に行う限り、積極的なプラスは期待できないと述べ、あわせて、苗の生育が余り促進されると、分球や裂球が増すというマイナスの面があるのではないかと、問題点を指摘している。は種期を逸した場合や、不適条件下での利用などの問題が残るが、3例の結論が一致しないので、上記の判定となり、試験継続と判定された。

2. キュウリ

(1) AHC-50 (日本カーリット、長瀬産業)：継続 — 試験年次不足。

ハイドロジエルの商品名を持つ土壌保水剤で、ポリエチレンオキサイドを50%含む粒剤である。保水性を高めることにより、根の活着・生育を促進し、苗床などでのかん水間隔減少による労力の節減を図りうるとして、申請されている。ハウス栽培で、苗床用土への混用と本畑での作付け時土壌混和处理が行われた。用土リットル当たり4~8gが加えられるが、栃木農試と埼玉園試が実施している。検討会の時点では、ともに中間報告であって、ともに処理苗が強健にみえ、生育のすぐれていること、苗床のかん水回数が著しく節減できること、マイナスの影

響は認められないこと、定植後の生育には大差がないと思われることなどの点で一致し、有望の方向で評価している。判定は成績の提出後となるが、試験としては年次不足なので、継続することが予定されている。

3. メロン

(1) AHC-50 (日本カーリット、長瀬産業)：継続 — 試験年次不足。

上記の薬剤で、かん水節減の目的と床土の保水力向上を目的とした試験を、静岡農試遠州園芸分場で実施した。途中不測の事故があり、試験のやり直しなどもあって、中間成績であるが、処理区の苗は生育がよく、その後の生育についても特にマイナスの面は認められていない。

4. 露地メロン

(1) ジベレリン・ α -NAA・4-CPA混合剤 (日本ジベレリン研究会)：保留 — 試験完了をまって判定。

露地メロンの着果確保・増進を目的として、既知の着果増進効果をもつとされる薬剤を混合した液剤である。薬液の作成方の詳細は省略するが、GA500ppm, NAA200ppm, 4-CPA300ppmを含有する子房塗布処理用のもの、GA250~375ppm, NAA100ppm, 4-CPA150ppmを含有する子房噴霧処理用のものがあり、開花2日前から開花当日までの間に1回処理をするという設計である。茨城園試と長野園試が‘プリンス’、山梨農試が‘コサック’、長崎総農試が‘キンショウ’、で試験を実施した。検討会の時点では、長崎のデータのみが提出され、その他は試験中であつたが、長崎では処理によって着果率が無処理の3~4倍となり、有望との

結果となっている。ただし、噴霧処理で新しようにモザイク状の葉害が現われたので、濃度を下げる必要があると提案されている。全場所の成績提出をまって判定をするが、試験として、GAあるいは個々の薬剤のその延長と認めるかどうか、問題が残っている。

5. イチゴ

(1) ジベレリン(日本ジベレリン研究会): 実用化 — (宝交早生・ダナー:電照(加温)を含む促成栽培:休眠突入抑制)休眠突入期と7~10日後の2回, 10ppm液5mℓ/株新葉を中心に散布。

GAのイチゴに対する利用は、すでに休眠打破促進効果と花芽発達促進効果について、実用化されている。近年のイチゴ栽培が、花芽の分化発達の促進あるいは抑制、休眠の打破あるいは延長などを中心として、多種多様な分化を遂げていることは周知のとおりであるが、そのための栽培の技術として、施肥や低温・日長の制御などの処理が採用されている。問題はその適期を選び、適確な処理を行うことであって、時期を失するとマイナスの効果があらわれ、致命的ともいえるダメージをうけることがある。GAは特有の伸長生長に及ぼす効果、あるいは他の生長調節物質の作用に及ぼす影響などを利用して、上記の様な形で、イチゴ栽培に実用化されている。

今回の処理は、休眠に突入するのを抑制することによって、花芽の分化・発達を制御し、増収・早期収量の増大を図ろうとするものであるが、南北に長いわが国では、休眠に入る時期に相当の地域差がある点に問題があり、その時期の適確な把握が第1の条件となる。今回の試験はGAの用途拡大試験の一つであって、10ppm

液を株当たり5mℓ程度10月中・下旬の休眠直前の株に処理するという試験を、‘宝交早生’を用いて静岡農試・奈良農試・佐賀農試が、また‘ダナー’を用いて茨城園試・群馬園試・埼玉園試が、おのおの実施した。結果は、‘ダナー’についてみると、3場所ともに処理区の生育がおう盛で、初期収量・全収量ともにまさり、十分実用化可能の効果を認めるとしている。‘宝交早生’についてもほぼ同様の結果で、初期・総収量ともに増加し、正常果・大果の割合が高くなるとされている。ただし奈良の場合は、小果の増加する傾向があるので注意が必要であり、処理量が多すぎるとむしろくず果の増大を招いて増収に結びつかないおそれがあると指摘されている。以上の結果に従って、各地で休眠期の異なることを配慮し、上記の様な表現での実用化が可能との判定が与えられた。

6. 草花一般

(1) AHC-50(日本カーリット、長瀬産業): 保留 — 試験完了をまって判定。

前出の薬剤で、カルセオラリア(千葉農試)、シネラリア・ポインセチア(東京農試)を用いて、はち物のかん水労力節約、根の活力増進効果が検討された。千葉農試では、4~12gℓの処理で、かん水間隔2~6日を設定して試験したが、いずれのかん水間隔でも、処理区は分枝数・地上部重ともにまさり、処理量が多いほど差が判っきりしていた。かん水間隔と処理との関係は、間隔が長くなるほど生育が低下するが、本剤の処理量の多いほど、低下の程度は軽減されている。開花日に対する処理の影響は明らかでなかったが、6日間隔区は、株の老熟の為か、開花が早まった。東京農試ではシネラリアの場合、処理による差は明らかでなかった

が、無かん水区の根の発育が著しいようであった。ポインセチアでも処理の効果は明らかでないが、処理区のほうがやや乾燥がおくれるように観察された。しかし生育後期になると、わずかに生育が劣るようであった。以上の様な経過であるが、試験が終了していないので、完了後に再度検討することとなったが、試験としては年次不足につき、再検討と判定されている。

(2) TGH-1 (武田薬品工業) : 実用化 — [キク・カーネーションさし芽床] さし穂切口に粉衣処理。

インドール酪酸の0.5%粉剤で、同系の薬剤としてすでに、エクベロン(塩野義)、オキシベロン(同)、ホルメックス(藤井農産)が、キク・カーネーション、花木、樹木類で実用化になっている。発根促進剤で、キク・カーネーションを神奈川園試相模原分場、愛知総農試園研、兵庫農試で試験した。その結果、発根率・発根数・根長について、兵庫のキクを除いて、いずれも有効との結果が得られ、対照に用いたオキシベロンに劣るとするもの、まさるとするものも相半したが、結論的にはほぼ同様の効果があると認められたので、上記の様な判定が与えられた。キクについては、品種によって有効の程度が異なるので、実用に当っては注意が必要であろう。

7. 花木一般

(1) TGH-2 (武田薬品工業) : 実・継続実用化 — [サザンカ、ツバキ、サツキ、クレマチス、アジサイ、ヒラドツツジ、マサキ] 切口粉衣処理。継続 — ドウダンツツジ、カイヅカイブキ、等他の花木について。

前出薬剤で、成分が1.0%の粉剤となっている。福島園試いわき支場、神奈川園試相模原分

場、三重農技センター、兵庫農試で、上記の各種花木について試験した結果、サザンカほか6種類については共通的に有効との結果が得られ、ドウダンツツジほか1種では無効であった。したがって、既知の同種薬剤でのデータをも考慮して、上記の様な判定が与えられた。

8. チューリップ

(1) EL-531 (武田薬品工業) : 実・継続実用化 — 1~2 ml (成分量0.25~0.5 mg) / 5号はち、草たけ8~5 cm時、土壌かん注処理。継続 — 品種とブラインド発生について。

昭和47年春夏作からユリ、キク、ポインセチアで試験の行われてきた、わい化剤であって、キク(ポットマム)、ユリ(テッポウユリ、スカシユリ、カノコユリ)、ポインセチアで実用化となっている。以前は‘アンシミドル’の名で試験が実施された。今回はこのほかにキク、ユリ、洋ランについて用途拡大の試験が行われたのであるが、チューリップについては、埼玉園試と鳥取農試西伯分場が0.25 mg (成分) 散布処理と0.25~0.5 mg (成分) のかん注処理を、多数品種を用いて実施した。その結果、わい化効果は、かん注処理の方が安定してかつ著しく、わい化の程度に応じて開花期のおけることはあるが、十分実用性ありと判断された。ただし埼玉において、フォステリアナおよびダーウィン・ハイブリッド系品種で、ブラインドの発生が著しくなったので、この点についてはさらに試験継続という判定が与えられた。

(2) IBA (塩野義製薬) : 実用化 — [促成栽培] 定植後100~200 ppm液株当たり1 ml 葉間滴下処理。

前出薬剤の‘オキシベロン’の方であって、

0.4%の液剤となっている。本剤のもつ伸長促進作用を利用して、第1葉が9~10cmに達した時、適量を処理して茎葉の伸長を促進し、生育の促進に伴う開花期の前進および、切花品質の向上を期待するものである。昭和48年の秋冬作で、すでに第1回の試験が実施されているが、今回は埼玉園試、鳥取農試西伯分場、福岡園試が、100~200ppm液を用いて、株当たり1m²の葉面滴下処理を実施した。その結果、埼玉ではこの処理によって脚部および葉の伸長は促進されるが、花茎（花首部）の伸長はむしろ抑制され、また開花促進そのものの効果は少ないとの結果を得ている。鳥取農試西伯分場（現鳥取野菜試・西伯分場）では、処理によって採花率が高まり、切花重がよくなるなどの品質向上効果を認めた。また福岡では、草たけ・茎長が長くなり、開花期の促進にはほとんど効果はないが、切花重や脚長がますなど、品質向上に有効との結論を得た。本剤の効果は、GAとの併用によって、さらに促進されるものと思われたが、試験の範囲では、単用で実用性ありとの判定が与えられた。

9. ユ リ

(1) EL-531（武田薬品工業）：実・継
実用化 — 1~2m²（成分量 0.25~0.5
mg）/5号はち、草たけ5cm内外の時、土
壌かん注処理。継続 — （テッポウユリ）処理
時期、処理回数・濃度について。

前出薬剤で、昭和48年から試験されている。
野菜試久留米支場と福岡園試で、テッポウユリ
とスカシユリを用いて処理を行った。処理法と
しては、1はち（5号）当り、成分量で0.25
~0.5mgを与える。散布処理あるいは土壌か
ん注処理が実施された（具体的方法としては、

3.3~6.7ppm液を75m²処理すると、こ
の成分量を処理したことになる）。野菜試久留
米では、テッポウユリの冷蔵球根は処理すると、
発芽しても展葉しないので、茎葉処理は適当で
ないこと、あるいは処理によって根の伸長の抑
制されるなどの問題点が指摘された。また処理
によって下葉の枯れ上る現象も認められたが、
わい化効果は、テッポウユリでは0.5mg、ス
カシユリでは0.25mg以上で、おのおの顕著
に認められた。したがって、以上のマイナス面
をどう評価するかには問題はあるが、わい化につ
いては有効との結論が得られた。福岡では、テ
ッポウユリで、わい化効果大きく、その程度は
散布よりもかん注処理が、また濃度の高いほど
著しいとの結果を得た。この場合も開花は遅延
したが、特別の障害というほどのものは認めら
れなかった。スカシユリについても、同様の効
果を認めた。以上の結果、スカシユリについて
は、効果は確実であるが、時によってやや不安
定であり、効果のあった場合も、発らい時にな
って、急に伸長して、わい化効果の消失するこ
とがあるうえ、根の伸長も抑制される場合があ
るので、よりよい処理量や処理時期について、
試験を継続することになった。（テッポウユリ
についても、実用化になった方法が適用できる
が、よりよい方法を検討するとの意である。）

10. シクラメン

(1) ベンジルアミノプリン（BA）（興人）

：継続 — 試験年次不足。

昭和48年秋冬作以来試験されている薬剤で、
スイカの着果安定、バラ・デンドロビュームの
わき芽の発達促進などが検討されている。バラ
やデンドロビュームについては、昨年もよい成
績を収めているが、試験年次不足で試験継続と

判定されている。今年はシクラメンの生長点に、 $100 \sim 200 \text{ ppm}$ 液を1株当り 10 m^2 噴霧して、開花促進効果を期待したものである。試験は埼玉園試と愛知農総試園研が担当したが、前者では、早期の高濃度処理で開花が約半月早められ、処理時期のおくれに従って効果が減ずるという傾向を認めたが、同時に奇型花が多発して実用性は疑問と思われた。愛知ではいずれの濃度でも顕著に開花が促進されたが、埼玉と同様奇型花の発生が著しく、それを防止する処理時期・処理方法の検討が必要と判断された。この様な問題点があるうえ、試験としては年次不足につき継続ということになった。

11. キ ク

(1) E L-531 (武田薬品工業)：実用化—〔大輪作り〕 1 m^2 (成分量 0.25 mg) / 5号はち、はち上げ後2週間、茎葉処理または土壌かん注処理。

前出の薬剤で、昭和48年秋冬作で、‘摘心2週間後 $0.25 \sim 0.5 \text{ mg}$ (成分量) / 5号はちで土壌かん注または茎葉処理’の実用化判定を得ている。今回の愛知園研の試験は、1本仕立ての、‘福助づくり’という特殊な仕立て方のものに処理されている。10月1日さし芽、同15日はちあげ、11月1日短日処理開始、同日処理であるが、いずれの処理法でも 0.25 mg 以上で有効であった。しかし 0.5 mg では開花遅延、花径の減少が起こり、個体間のばらつきも大となって、品質が低下した。したがって、この材料については、 0.25 mg / 5号はちで十分の効果があると判定された。検討会では、この処理量を適確に施用する方法について議論があった。その結果、具体的な方法としては、‘ 3.3 ppm 液の、5号はち1はち当り、

75 m^2 、茎葉または土壌かん注処理’というやり方で、目的を達成しうるとの合意に達している。これは薬害の点も考慮して定められたものであり、品種や別の仕立て方に対しては、前回の判定どおり、 0.5 mg でも利用可能と考えられる。普及の段階でこれらの点は十分検討すべきであろう。

12. ポインセチア

(1) ベンジルアミノプリン (BA) (興人)

：継続 — 処理時期・処理方法について再検討

前出の薬剤で有効枝の発生と伸長を期待して摘心後に、前年枝の葉こん部塗布処理を行うものである。 $0.25 \sim 0.5\%$ ラノリンペーストを塗布する処理が、神奈川園試・愛知農総試園研・高知大学で実施された。その結果、各場所ともに処理芽の側芽発生は促進されたが、いずれも半数近くが伸長をつづけるに止り、残りも短い枝のままであったり、有効枝数で無処理と差がなかったりして、満足すべき状態ではなかった。処理後の栄養条件、生長調節物質の投与をはじめ、処理時期、処理方法、処理する材料の状態 (頂芽の有無など) の検討など、有効枝数を確保しうる方法の検討が必要と結論され、これらの点につき試験継続との判定が与えられた。

13. 洋ラン (デンドロビウム)

(1) E L-531 (武田薬品工業)：継続 — 試験例数不足。

前出の薬剤で、リード (新芽) の伸長抑制など、わい化効果による草姿の調整が期待された。 $0.25 \sim 1.0 \text{ mg}$ / 5号はちかん注処理が、5月7日愛知農総試園研で実施された。その結果、根部かん注によってリードの伸長は抑制され、高濃度ほど効果顕著であった。これは節間伸長

の抑制によるものであるが、花芽の着生数には影響がないので、実用化の可能性大と考えられた。試験例数の少ないことと、処理次年度への影響を明らかにする必要があるので、試験継続と判定された。

(2) ベンジルアミノプリン (BA) (興人)

：実用化 — 0.25 ~ 0.5 % ラノリンペースト 切口塗布。

前出の薬剤を、バルブからの高芽発生促進を目的として処理するもので、0.25 ~ 0.5 % ラノリンペースト塗布を、神奈川園試と愛知農総試験園が実施した。神奈川ではバルブを2節で切り、上部切口に一樣に塗布する方法で処理されたが、高芽の発生が著しく促進され、実用的には0.25 % 処理で十分と考えられた。愛知園研では神奈川と同様の方法で処理したが、ほう芽およびほう芽後のシュートの伸長に対して、神奈川ほど明らかな効果は得られなかった。しかし、昨年までの試験で有効性が認められており、愛知の結果も否定的なものではないので、上記の様な方法での実用化が認められた。

14. バラ

(1) ベンジルアミノプリン (BA) (興人)

：実用化 — 0.25 ~ 0.5 % ラノリンペースト (切) 傷口塗布。

前出薬剤で、ベーサル・シュートの発生促進を目的に処理されている。試験を実施したのは神奈川園試と愛知農総試験園で、0.25 ~ 0.5 % のラノリンペーストを、ベーサルシュートの基部のわき芽の上下5 mm のところに傷をつけて塗布するという処理を行った。効果は処理薬量・品種に関係なく認められ、発生したベーサルシュートの下葉が奇型となることや、樹令によっては薬害の発生することもあったが、いず

れもやがて消失して実害を伴うものではなく、実用性ありと判定された。

(B) 前回検討未了成績

1. イチゴ

(1) ヒドロキシイソキサゾール (三共) : 継続 — 試験年次不足。

健苗育成を目的として、子苗床に処理される前出の薬剤で、栃木農試 (ダナー)、岐阜農試・福岡園試 (宝交早生) が、25 ~ 75 g/m² の子苗床処理を行った。処理苗の本畑における生産力をもって効果の判定を行ったが、栃木佐野では無処理と差なし、岐阜では初期収量はやや多収であるが、後期収量は減収、福岡では、75 g で増収となったが、処理量との間に一定の傾向なし、という結果であった。苗の生育はすぐれているとの観察もあるが、この種の薬剤は、最終的な実効と結びつく効果を示すものでなくては、処理の意味がないので、さらに検討が必要であろう。

2. カブ

(1) ヒドロキシイソキサゾール (三共) : 継続 — 試験年次不足。

前出の薬剤で、ほ場のは種前混和处理 (25 ~ 75 g/m²) によって、初期生育を確保し増収効果を期待するものである。埼玉園試が担当したが、処理区はいずれも発芽率低く、生育も当初から遅れ、収量も処理量に応じて減少した。これらは処理による生育阻害とみられ、この処理方法では実用性は期待できないと判断された。試験年次不足で継続との判定が与えられた。